

編集後記

三重大学留学生センターの『紀要』も第四号を発刊することになった。

じかんのたつのはほんとうにはやい “時間過得真快。” / なにもしないうちにとはとってしまうもの “少年易老学難成，一寸光阴不可輕”

うっとりゆめをみているうちに 未覚池塘春草夢， はや、おいさまがみえてきた 階前桐葉已秋声。”（朱 ちゅうごくのむかしのひと 熹）

それはさておき 閑話休題、／20世紀をふりかえってある人がこう言った。20世紀は、精神面ではFが「無意識」を発見し、社会面ではMが「階級」を発見した時代だ、と。（両方とも目に見えないものなのが面白い。）FとMは有名な人である。Fと縁の深い人にはYがいる。そして、Mは対立・闘争史観を持っていた人だと言えはわかるであろう。／FとYは、後年、たもとを分かった（二人が話していたとき、ガラスのコップがピシッと音をたててひびが入るラップ現象があったという）が、その理由にはFが客観性に固執したのに対して、Yが「集会的無意識」という宗教的な概念を使用したことも関係しているであろう。Mの思想はすぐれて実践的で、対立する敵を殲滅（せんめつ）することも辞さない思想であったから、「敵」の「階級」は恐れおののいた。／ある人によると「階級」というのは他のそれと「全く通じあわない」「断絶した」概念なのだそうである。話すことばもちがえば、教養もちがう、見た目も全然ちがうとのことである。／問題はどうか「焦点」と「編集作用」のようにも思える。何に「焦点」をあて、どのように「編集」するかで、それを見る者に与えるイメージは全くちがったものになってしまう。また、それを生む「意向」「情念」のようなものも問題になってくる。／無論（れん）如何（いかに）「不連続」でものをみようとするのか、それとも「連続」においてものをみようとするのか、それはこれからの世界の課題の一つではないかと思う。後者の道を歩む上で、この『紀要』がいささかでも役立てば幸いである。いつものことながら、最後に、『紀要』第四号の作製にあたってご協力いただいた関係各位の皆様方に心より御礼申し上げます。（F・M）

三重大学留学生センター紀要 第4号

2002年3月20日 印刷

2002年3月25日 発行

編集委員：藤田昌志（委員長）

鹿嶋恵

宇納進一

発行者 三重大学留学生センター

〒514-8507 三重県津市上浜町1515

印刷所 伊藤印刷株式会社

〒514-0027 三重県津市大門32-13

TEL 059 (226) 2545 FAX 059 (223) 2862